
遊戯王 ～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

【Nコード】

N7862Z

【作者名】

露

【あらすじ】

冬休み最終日、その高校生は母親に買い物を頼まれた。その帰り道、彼は謎の男と出会い、デュエルすることになる。そしてそのときから、彼の日常は大きく変わろうとしていた……。

※遊戯王を織り交ぜた学園物だと思ってくれれば幸いです。

プロローグ　〈始まりはいつも唐突に……〉（前書き）

初めまして。今日からこちらでも小説を書くことにしました。時期が時期なので結構不安だったかもしれませんが……。後、不安だといえ赤ちゃんと言結出来るかどうか、ですね。

まず、この話を読むに当たって注意事項を。

- ・この話はアニメの再編物語ではありません。
 - ・主人公の使用デッキは不特定です。
 - ・基本、チートドローだったりじゃなかったりとか。
 - ・この話のデュエルディスクは基本的にはアニメ、遊戯王ZEXALの遊馬が使っているようなものです。
 - ・更新は不特定です。
 - ・一話一話が基本短いです。
 - ・自作オリカなんてありません。
- 以上、ですかね。

では、どうぞ。

プロローグ　　始まりはいつも唐突に……

それは、突然のことだった……。

「私と、デュエルして下さい……」

そいつとあったのはホント余りにも突然のことだった。

「お前は誰だ？　俺は訳の分からん奴とデュエルするつもりはない」

確か俺は母さんに買い物を頼まれて……、今はその帰りの途中のはずだ。それに昼間だから辺りはまだ明るい。

「フフッ、貴方はまだ自分のおかれた状況が分かってないようですねえ」

は？　　どういうことだ？

「辺りを見てみたらどうです？」

謎の男が何言ってるのか俺にはよく分からんが、辺りを見してみる。すると、明るかった空が黒い。というか、何かに包まれてる感じがだ。

「漸く目が馴れてきたようですねえ」

今まであいつのことしか見てなかったから気づかなかったのか……。

「これは……、お前がやったのか？」

「そうとも言えますし、そうじゃないとも言えます」

「意味不明……」

「因みに、素直にデュエルしてくれば何も起きやしません」

「……受けないとしたら？」

「さあ？ そのときは私にも分かりません」

逃げ道なし、か。

「いいだろう、お望み通りデュエルしてやる」

「フフッ、私にとっては嬉しい限りです」

全く、敬語が不気味な野郎だぜ……。

そして、この掛け声で俺達のデュエルが始まった。

「「デュエル！」」

そして、数ターンと30分が経過した頃……。

「リビングデッドの呼び声を発動、墓地のスクラップ・ドラゴンを蘇生。カードを一枚を伏せ、スクラップ・ドラゴンの効果発動、今伏せたカードとお前の伏せカードを破壊。そしてお前にダイレクトアタックして終わりだ！」

謎の男 LP 0

よし、勝った！ これで解放される。

「クッククク……」

「何だ、何がおかしい？ 俺はデュエルに勝ったんだ。早く解放しろ」

「おや、これは失敬。やはり貴方がスクラップ・ドラゴンの使い手でしたか……」

やはり？ どういうことだ？ それに、スクラップ・ドラゴンはレア度の高いカードだが、使っている人は結構いるぞ？

「おい、どういうことだ？ ちゃんと説明しろ！」

「時期に分かることです。然し、ここでの事は忘れてもらったほうが今後の都合にとってもいいことでしょう」

膝をついていた男が立ち上がって両手を広げる。

「何をする気だ！？」

「また会うことを楽しみにしてますよ」

俺の意識が朦朧としていく中、あいつはそう言って消えていった。クソ、まだ聞きたいことがあるのに体が動こうとしねえ。

そして俺は、完全に意識を手放してしまった……。

プロローグ く始まりはいつも唐突に……く（後書き）

次は近いうちに投稿したいと思います。

では、感想やアドバイスをよろしくお願いします。

TURN 1 〈全ての始まりは日常から〉（前書き）

少し早めに投稿できました。

それでは第1話、どうぞ！

TURN 1 〈全ての始まりは日常から〉

目を覚ますとそこは見慣れている白い天井、俺の部屋だった。眠っていたのか、俺は……。

「やっと起きたんだ」

頭を覚醒させると聞き慣れた女性の声がした。体を起こし、その声の主のほうを見る。そこにはセミロングの茶髪の俺の妹、北条真波ほうちょう まなみが椅子に座って心配そうな表情で俺を見ていた。

「おはよう、龍一」

「おはようって……、今何時だよ」

俺の名前は北条龍一ほうちょう りゅういち。近くの私立高校に通っている一年生だ。

それよりも、外は暗いのおはようって……、何の冗談だよ。

「7時半だよ」

「7時半って……、もう夜中じゃねえか」

というか、いつから俺は寝てたんだ？ 確か、母さんに買い物を頼まれて、それで……。

「そんなことより龍一が道端で倒れている、て聞いたときは私もお母さんも吃驚したよ！」

「え、倒れていた？ 俺が？」

はて、そんなことあったっけな……？

「買い物から終わった後に倒れてたんだよ？ 幸い、何も取られてなかったからよかったものの……。私達、本気で心配したんだよ！」

「そうか……。悪かったな……」

磨波はそれ以上何も言わない。その顔を見てるだけで俺を心配してくれてるのはよく分かる。

「……もうすぐご飯だから、早く支度しなさいよ？」

彼女はそれだけ言って俺の部屋からでていった。

しかし、色々疑問がある。まず、買い物に行ったこと、これは覚えている。問題はその後だ。買い物したデパートからここまではそんなに離れていない。だが、帰り道のことを覚えていない。俺は襲われたのか？ それにしちゃ何も取られてないのは不自然だし、第一痛みを感じない。疲労で倒れたにしちゃ寝てた時間が短いし……。

「……わかんねえもんは分かんねえか」

俺はそう納得させて部屋を出て一階に降りた。

＊ ＊ ＊

俺は今食事しているのだが、どうもさっきから考え事にばかり頭が行って箸が進んでない。

「龍一、大丈夫？」

そう声をかけるのは俺の母、北条真由美だ。ほうじょう まゆみ俺の通ってる高校の教師をしている。

「大丈夫だよ。ちょっと考え事してただけだ」

「本当に？ きょうも道端で倒れたんだから早めに寝るのよ？ 明日からは学校でしょ？」

「わあってるよ」

まったく、心配してくれんのはいいけど過保護なんだよな、俺の母さん。

「大丈夫だよ、お母さん。龍一は平気だって。それよりも後でデュエルしろ！」

「はいはい」

真波は元気だよな、ホント。

その後、夕飯が終わって片付けをした後、俺達は庭に出てきた。全く、冬の夜はホント冷え込むな……。

そして、デュエルディスクを腕に装着すると俺達は構えた。

「じゃあいくよ、龍一！」

「ああ！」

「デュエル！」

TURN 1 〈全ての始まりは日常から〉（後書き）

次回からデュエルが出来そうです。

では、感想やアドバイスをお願いします。

TURN 2 〽飛翔せよ! スターダスト・ドラゴン!〽 (前書き)

デュエルに当たってのこの小説のルールは以外の通りです。

・ライフポイントは4000でスタート。それ以外はOCGRルールです。

・制限、禁止リストは最新のものを使います。

大まかなところは以上です。

では、どうぞ。

TURN 2 〈飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン！〉

龍一	LP	4000
真波	LP	4000

「じゃあ行くぞ。俺のターン！」

さて、真波とのデュエルが始まったわけだ。デッキからカードをドロ―し、それと手札を確認する。うん、結構いいほうだ。

「召喚僧 サモンプリーストを召喚。効果により守備表示に変更。そしてサモンプリーストの効果発動。スクラップ・エリアを手札から墓地に送ってデッキからスクラップ・ビーストを特殊召喚」

初期手札にしちゃ結構いいほうだ。俺の目の前にはソリッド・ヴィジョンとして2体のモンスターが現れる。このデッキの要の一つであるビーストがこうやって出せたのは最初の段階では嬉しい。

召喚僧	サモノプリースト	DEF	1600
スクラップ・ビースト	ATK	1600	

「あちゃー、そのデッキか……。しかもその布陣だと……」

真波は呆れている。この状態はよく見るからこの後の展開も予想出来るだろうな。

「まあな。俺はレベル4のサモンプリーストにレベル4のビーストをチューニング、シンクロ召喚！ 飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン！」

サモンプリーストが4つの光となり、ビーストが4つの輪となって光を包む。その後、一段と輝きが1つになり強くなると俺はエクストラデッキから1枚のカードをディスクにセットした。そしてフィールド上にはその名の通り星屑の煌きを体に纏った美しい龍が舞い降りた。

「いつ見ても綺麗だけど、やっぱりそいつかー!!」

真波は叫ぶ。それは嫌だ、という感じに。効果が時々厄介なんだよな、こいつ。レベルの割に打点が低いが、ノーコストに近い破壊無効効果がある。だから主力モンスターはこの攻撃力2500を越えるかどうかが鍵になったりする。

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

フィールド上に裏側のカードが現れる。そしてフィールドのスターダストを見る。あれ、今こっちを向いてた？

「私のターン、ドロー!」

真波は勢いよくカードを引き抜く。元気なことだ。

「私は光の援軍を発動!」

あいつは今引いたカードを見せる。というか、それを引いたのか。俺とのデュエルだと大抵最初の手札にあるんだよな、あれ。すごい引きだと思う。

「デッキトップ3枚を墓地に送ってデッキからライトロード・サモナー ルミナスを手札に加えるよ。そして、ソーラー・エクステンジを発動！ ウォルフをコストに2枚ドロしデッキトップ2枚を墓地へ。もう1枚のソーラー・エクステンジを発動してジェインをコストに2枚ドロしてデッキトップ2枚を墓地に」

うわー、すごい勢いで回ってるよ、あのデッキ。最初の援軍でライニャンとガロスとオネストが、エクステンジ2枚でライラとブラック・ホールとエイリンとサイクロンが落ちた。だが、墓地にはライトロードモンスターが6種類。あいつのデッキは純粋なライトロード。この状況だと……。

「裁きの龍を召喚！」

やっぱりきたか、あいつの切り札。流石、としか言えないな。

裁きの龍 ATK 3000

「伏せカードが怖いけどここは臆せず攻める！ バトル、裁きの龍でスターダストに攻撃！ ライトニング・ストライク！」

スターダストがいるから効果を使わなかったか。そして、真波の呼びかけに答えて裁きの龍が口から光線を放つ。だが、その光線が細くなりその龍も小さくなった。

裁きの龍 ATK 1500

「何で攻撃力が半分に！？」

「そりゃ、収縮を発動させたからな」

俺のフィールドのカードが1枚オープンされる。それは速攻魔法だった。

「それを伏せてたの!？」

「意外か？ スターダストで迎撃、響け！ シューティング・ソニック！」

俺の呼びかけに答えてスターダストが口からかなり速い衝撃波を出して裁きの龍を破壊した。

「あちゃあ……。メイン2でモンスターをセットしてカードを1枚伏せてターンエンド！」

真波 LP 3000

「俺のターン！」

さて、モンスターはいいとしてあの伏せカードが怖いな……。誘ってみるか。

「スクラップ・ビーストを召喚！」

フィールドにまた機械化された獣が現れる。

「そのときトラップ発動！ 奈落の落とし穴！」

やっぱりか……。

「速攻魔法、スクラップ・スコールを発動。ビーストを選択」

「それもあったの!？」

真波は驚いているがそこまでか？ 誘ってみた俺も俺だけ……。相変わらずひっかかり易いなあ……。

TURN 2 **く飛翔せよ!** **スターダスト・ドラゴン!** **く(後書き)**

取り敢えず、最初のデュエル前半は終了。後半は近いうちにできると思います。

では、感想やアドバイス、間違いの指摘をお願いします。

TURN 3 く刺され! 禁じられた聖槍! く (前書き)

前回の後編です。

TURN 3 　く刺され！　禁じられた聖槍！く

龍一	LP	4000
真波	LP	3000

「効果は分かってるな？　デッキからスクラップ・キマイラを墓地に送ってシャッフル、その後ドローしてビーストを破壊する」

「奈落の落とし穴は無意味になる、と」

「そゆこと。スクラップ・スコールで破壊されたビーストの効果発動。墓地からキマイラを手札に加える」

真波は相当落胆している。そうだろうな、自分のかけた罠に引っかからなかったからな。

「バトル。スターダストでセットモンスターを攻撃、響け！　シューティング・ソニック！」

一通りの処理を終えると俺は攻撃に移る。そしてスターダストに攻撃を指示すると彼は口から衝撃波を横向きの裏側のカードに放つ。そのカードは表側になると小さな犬が現れ、破壊された。

「セットモンスターはライトロード・ハンター　ライコウ。デッキトップ3枚を墓地に送るよ」

「破壊しないのか？」

「スターダストで無効にする気でしょ……」

真波が苦笑して言う。まあよく使う効果だからな。

「じゃ、カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターン！」

さて、ここからあいつはどう動く？

「私は手札抹殺を発動！」

マジかよ！？ そのカードはかなりキツイぞ。しかも来たカードはそこまで良くない……。

「裁きの龍を特殊召喚！ そして効果を発動！」

え、あいつは何をする気だ？

「スターダストの効果発動！ ヴイクテム・サンクチュアリ！」

スターダストは一つ咆哮すると光を拡散させ裁きの龍を包み、消えていく。それは、裁きの龍も同じだが……。

「3体目の裁きの龍を特殊召喚！」

何っ！？ あいつはなんつー引きしてるんだ！？ それは流石に予想出来なかったぞ！

「裁きの龍の効果発動！ このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する！」

「くっ！ 速攻魔法、禁じられた聖槍を発動！」

裁きの龍が光を放つと同時に俺のカードが開いてそこから出た槍が裁きの龍に刺さった。痛くないのか？ いや、呻き声あげてやがる。

裁きの龍 ATK 2200

「あちゃあ……。私はライトロード・マジシャン ライラを召喚してバトル！ ライラと裁きの龍でダイレクトアタック！ ライトニング・ストライク！」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 1700

マズい！ フィールドがガラ空きになった以上、直接受けなきゃいけない！

「ぐう……」

ここまでギリギリまで追い詰められるとやはりキツイものがあるな……。

「エンドフェイズにデッキトップを7枚送ってターンエンド」

「そのとき、スターダスト・ドラゴンはい舞い戻る！ 再び飛翔せよ！」

裁きの龍 ATK 3000

龍一 LP 100

真波 LP 1000

さて、スターダストがフィールドに戻ってきたはいんだが、手札がブラック・ホールにスクラップ・スコール、強制脱出装置じゃない。次のドローが問題だな。

「俺のターン、ドロー！」

俺は引いたカードを確認する。これは……！

「このまま終わらせる。バトル！ スターダストでライラに攻撃！ 響け、シューティング・ソニック！」

「え、終わらせるってどういうこと！？」

まあ、あいつが驚くのも無理ないな。このままだとライフは2000残るからな。

「2枚目の禁じられた聖槍をライラに発動！」

「……え？」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 900

同じ槍が今度はライラに刺さる。あいつも痛そうだな。しかもお腹って……。そしてスターダストの衝撃波が当たる。何か申し訳ないな……。

真波 LP 0

真波のライフが0になり俺の勝ちが表示されると、モンスター達が消えていった。そのとき、スターダストが俺を見てたようだが……、気のせいだよな？

「……振り回されっぱなしだった」

「まあ、そういうデッキだからな」

負けて啞然とし座り込んでいた真波が最初に言ったのはそれだった。あながち間違いじゃないからな。

「じゃ、俺は風呂入って寝るよ。少し早いが明日から学校だもんな」

「あ、そっか」

そして俺達は家に戻っていく。まだ10時だが、昼間のこともあるしな。

「そうだ。真波、ちゃんと勉強しとけよ？」

「大丈夫よ。貴方の高校ぐらいなら合格は簡単だから」

「あ、そう」

今の会話の通り、真波は中学3年生の受験生だ。見た目は可愛いのは分かるが人の心配をそう返さないでほしいなあ。ま、こいつは優等生だから大丈夫だろうけど……。

TURN 3 〽刺され！ 禁じられた聖槍！〽 (後書き)

取り敢えず、最初のデュエルは終了となります。如何でしたか？

では、感想やアドバイス、間違いの指摘があると嬉しいです。お願いします。

TURN 4 精霊 現る! (前書き)

今回の話は前の話の次の日のことです。デュエルはなしです。

では、どうぞ!

TURN 4 精霊 現る！

「じゃあ龍一、また後でね！」

「ああ。走るのはいいが、道に気をつけろよ？」

「大丈夫大丈夫！」

俺達は今、学校に行く途中。真波とは途中まで通学路が一緒だからよくこうして歩いている。で、その分かれ道の大通りまできた。

「さて、と……」

真波を見送った後、俺は振り返る。そこにも、否、どこを見渡しても学生やサラリーマンの姿ばかりだが俺達の来た道を見る。

「いい加減出てきたらどうだ？ 家からずっとついて来られて少し不愉快なんだよ……」

少し大きな声で言ったからか周りの人が驚いてこっちを見ているが俺は気にしない。少しすると周りもまた動き出して俺のことを気にしない。

そして突然光が一点に集中して龍の形、そしてよく知っているモンスター……に？

「……え？」

そう、よく見知ったモンスター、俺の非常に気にいったドラゴンの

シンクロモンスターの2体のうちの1体、

「スターダスト……ドラゴン？」

そう、スターダスト・ドラゴンが現れた。

「こうして会うのは初めまして、になるな、北条龍一」

「俺を……知っているのか？」

＊ ＊ ＊

「じゃあ、お前の声は基本的には誰にも聞こえない、と」

「そういうことだ」

歩みを進ませながら、このスターダストがソリット・ヴィジョンではなく本物として見えるということに慣れてきた俺は彼と話していた。

話によればデュエルモンスターズの精霊ということらしい。そういうものが見える人はそうそういない。見える原因はそういったデュエルモンスターズに何かしらの大きな影響を受けること、らしい。らしい、といのも俺に何が起きたのかが分からない。昨日のことをしっかり覚えていたら何とかなったんだろうが……。それに彼ももう1体の精霊も昨日は俺の近くにいなかったから分からない、とのこと。というか、俺には精霊がもう1体いるのかよ、と突っ込みたくなったが気にしない。精霊が見えるとか、アニメでもあったな。

そうそう。この世界では遊戯王は超有名なカードゲームだ。それは

プロデュエリストがいる程に。そのため、みんなデュエルのは知っている。

「精霊が見えるなんて夢のようだ」

「夢じゃない。現実にはこういうことはあるのだ」

「分かってるよ」

実際に、俺の目の前にあるのは本当のことだ。夢だとは思わない。

「次いで言うておくが、私は女だぞ」

「マジ……で？」

「マジだ」

俺は驚愕の事実を今ここに突きつけられた。

「なん……だと……」

俺は奈落の落とし穴の底に叩きつけられたようだった。別に、地獄でも絶望的でもないのだがその様な感じがした。

TURN 4 精霊 現る! (後書き)

スターダストの性別は批判があると思います。反論はいいですが、
変えるつもりはさらさらないです。

では、感想やアドバイスをよろしくお願いします!

TURN 5 龍一の友達 (前書き)

今回もデュエルなしです。では、どうぞ。

※前回、題名がTURN 5となっていました。正しくはTURN 4でした。誠にすみません。TURN 5は今回の話です。

TURN 5 龍一の友達

「おはよう、みんな」

スターダストが女性だという驚愕の事実から10分、家から歩いて約30分程した所の高校に着き、教室に入った。スターダストはというと現在は物凄く小さくなって俺の肩に乗っている。

「おーっす、龍一！」

「相変わらずおせえなあ、お前は！」

「そうか？ いつも通りだと思っただが」

俺の挨拶に眼鏡をかけた黒の長髪の男と、少し赤みがかった髪の男が声を返す。眼鏡をかけたほうは黒木優、赤髪のほうは速水翔という。

「おはよう、龍一！」

「のわっ!？」

バックを席に下ろし、コートを脱ごうと思った矢先、後ろから抱きつかれた。バランス崩しそうになったが、何とか保った。こんなスキップするのは俺の知る限り一人しかない。

「やっぱお前か、悠奈」

「エヘヘ、やっぱ龍一はあったかい」

俺に抱きついていている青髪ショートカットの快活そうな女子は響悠奈ひびき ゆうなだ。因みに、これはこいつなりのスキンシップ兼湯たんぽということだ。スターダストは現在、俺の頭に逃げている。当初は驚いたが今はもう慣れた。そして俺達は付き合ってるわけではない。そこ、勘違いするなよ？ 背中に感じる柔らかな感触はどうなんだ、て？ そんなもの味わうことより暑くてコートを脱ぎたい。それに、そんなことを堪能しようだなんて全く考えてないからな！

「おはよ、龍一」

「おう、おはよう、葵」

最後に俺に声をかけて近づいてきた栗色の腰まであるロングヘアの女子は篠宮葵しのみや あおい。可愛いというより綺麗とか、美しいというほうが似合う少女だ。出会ったばかりはかなり冷たい態度を向けられてたけど。今でもそういうことがあるが、時々見せる笑顔はホント可愛いと思える。

因みに、この女子二人は校内で結構モテるほうでよく告白されている。然し、二人は全部蹴っている。

そうそう。この4人も遊戯王をやっている（当たり前前なんだが）、優は光と闇を使ったカオスデッキ、翔はドラグニティ、悠奈は魔法使い族、葵は代行天使を使っている。

俺達は基本、この5人で行動している。みんなの仲は非常にいいほうだと思う。

俺達は会話していると程なくして担任の先生が来て朝のHRが始ま

ホームルーム

る時間になった。

＊ ＊ ＊

「みんなちゃんというわね。それじゃ、今日は転校生を紹介するよ」

先生がクラスの出席を確認すると俺達にそう報告した。それを聞いてクラスは少しざわめく。

「転校生？」

「誰なんだろう？」

「格好いい男の子かな？」

「いや、可愛い女の子だ！」

まわりが色々と話し出す。どうでもいいが静かにしろ。

「静かに！」

先生がそう言うのと周りも静かになる。

「じゃあ、入ってきて」

静かになると、先生がそう言って前のドアが開く。そこから、肩につくくらいの黒い髪の子がいた。

「今日からこの学校に転入してきた倉木奈々（くらき なな）さんです」

「倉木奈々です。皆さん、よろしくお願いします」

「質問とかあるだろうけど、後で各自でしてね。倉木さんの席は響きさんの隣が空いているのでそこを使ってね」

「はい」

「それじゃあ、これから始業式だから体育館に行きましょう」

先生がそう言ってH Rが終わる。面倒だが行くしかないんだよな、体育館に。

＊ ＊ ＊

始業式と連絡事項が終わって学校が終わり、俺達は教室の一角に集まっていた。

「悠奈、お前が連れてきたのは……」

「そう、転校生の奈々だよ。これから昼飯食べに行くでしょ？
奈々も一緒にいいかな、と思って」

「皆さんが迷惑じゃなければいいんですが……」

「全然大丈夫だよ！」

「寧ろ俺達のグループに入らない？」

「グループ？」

「うん。デュエルが大好き、てさっき言ってたからどうかな？」

「盗み聞きか？ 悠奈」

「そうじゃないから！」

「あ、じゃあよろしくお願いします」

「おう。こちらこそよろしく！」

「俺達の間じゃあそんな固くなんなくていいぜ」

そんなこんなで俺達のグループにメンバーが追加されたのだった。

TURN 5 龍一の友達（後書き）

最後の最後に会話ばかりになったような気がする……。

では、感想やアドバイスのほうをお願いします。

あと、どなたかは知りませんがお気に入りに登録してくれてありがとうございます！
引き続き読んでいただけると嬉しいです。

TURN 6 〈精霊体と実体化〉（前書き）

新年あけましておめでとうございます！ 今年もよろしく願います。
今年の目標は小説の完結を目指すことですね。

さて、新年の挨拶もそこそこに、本編スタートです。

TURN 6 　　精霊体と実体化

昼食を終えてみんなとデュエルをして遊びある程度時間も経った頃、彼等はそれぞれの帰路についていた。俺はデパートの食品売り場に來て夕飯の材料を買っていた。

「うーん……」

で、俺はある物の前で悩んでいる。買い物籠を左腕にかけて両手に一個づつ持って見比べていた。

「何をそんなに悩んでいるのだ？」

「肉をどっちにしようかな、と」

そう、肉について悩んでいた。スターダストに聞かれて答えても悩んでいた。

「そんなに悩むことなのか？」

「悩むよ！　いい？　こっちの肉は量が多いんだけどこっちの肉は断然に質はいいんだ！」

つい大きな声で言ってしまった。然し、質は欲しいけど最近我真波もよく食うからなあ。やっぱり量のほうが……。料理に妥協は許さないのが俺の主義だ！

「……よく分らん」

＊ ＊ ＊

「で、結局2つとも買ったのか」

「まあね。あって損は無いし」

そう、2つとも買ってしまった。片方しか使わなかったとしてもどうせ明日の料理に使うだろうから大丈夫だろう。何か叔母様達や幼い子供連れの奥様達に変な目で見られていた。多分、大きな独り言を言ったと思われたんだろう。うん、周りにはスターダストが見えないことを考慮してなかった。少し恥ずかしい。そして、買ったものをバック詰め、デパートを出ようとした。

「……って、雨かよ。傘持ってきてないしなあ。しょうがない、走ってかえ……る？」

雨が降っていたので仕方なく走ろうかと思ったその矢先、突然声が頭に響いた。

「……こっちか？」

家とは違う方向に走っていく。気のせいならいいけど、何かそんな感じがしない。スターダストが家は違う方向とか言って後ろからついて来てるけど、気にしていなかった。

(た……たすけ……て)

「また、声が……」

はっきりと聞こえた。近くなのか？　そうやって走っていくと林の

ような所に出て、そこに倒れている少女が見えた。

「大丈夫!？」

俺は近寄り、彼女の体を揺する。声が少し聞こえたから意識はあるようだが、かなり衰弱してるな。

「こいつは……!」

「事情は後!　まずは家に運ぼう!」

そう言って俺は彼女を抱えて走って家に向かった。勿論、彼女の近くに落ちていた遊戯王のカードも一緒に。

＊ ＊ ＊

(やっぱりそうなのか?)

「ああ、間違いない。あの娘もデュエルモンスターの精霊だ」

家に連れてきた後、彼女には風呂に入ってもらった。途中で意識を取り戻したから騒がれるかと思ったが、驚いた目をしたがすぐに警戒心を解いた感じだった。そして素直に俺の言うことに従ってくれた。

で、何故俺が言葉を出さずにスターダストに話しているのかというと、隣に真波がいるからだ。彼女は精霊のことを知らない。だから口に出す訳にいなかった。

(そう言えば、精霊の実体化って君も出来るの?)

彼女をここに運んだ後、1つ疑問があった。精霊体であれば俺に見えない。だが、彼女は真波にも見えた。ということは、実体化している、ということになる。精霊化だと、俺だと触れるが真波は何も見えず触れない。現にスターダストもそうだ。

「確かに出来るが、人型でないから難しい」

（変身能力でもあるの？）

「似たようなものだ。最近じゃそれが出来なくなったが別に気にすることもないけどな。それと、彼女はもとより人型の精霊だけどな」
何か色々ややこしいな。

「あの、お風呂ありがとうございます」

そんなこんなで時間が経つと風呂場から出て真波の幼い頃に来ていた服を着て少女は現れた。どうやらお風呂からあがったようだ。

「大丈夫だった？」

「はい。あの、わざわざ助けて頂いてありがとうございました」

「どういたしまして」

真波は心配して彼女に近寄る。こいつも過保護なんだよな。そして彼女は丁寧にお辞儀までして俺にお礼を言う。別段特別なことはしてないはずだけど……。

「単刀直入に訊くけど、君のデュエルモンスターの精霊だね？」

真波が関係ない。彼女のことは色々知っておかないといけないからな。当然、真波は驚いている。

「龍一、どうしたの？ 頭でも打った？ 彼女は現実ここにいるのよ？ そんな非常なことがあるはずが……」

「貴方の仰る通りです」

「そうそう、仰る通り……って、え？」

真波は再び驚く。それはそうだろう、自分の思ってもみなかった答えが来たのだから。

「貴方の仰る通り、私はデュエルモンスターの精霊です！」

彼女の言葉を聞いてやっぱりと言う俺と、驚きの余りにその場から動けない真波がいた。

TURN 6 精霊体と実体化（後書き）

龍一の趣味の一つは料理です。下手をすると趣味の域を超えてるかもしれない。彼の家族で料理するのは龍一か彼の母親のどちらかです。

では、感想をよろしくお願いします。

TURN 7 〈エフェクト・ヴェーラー〉 (前書き)

ここまでデュエルが無いのも珍しい気がする。

では、本編をどうぞ。

TURN 7 〈エフェクト・ヴェーラー〉

俺が助けた少女は青い長い髪と金色の目、今は違うがボロボロだった白い服、そして何より今は消しているが背中にある透明感のある翼のようなもの。落ちていたカードのイラストから、俺は彼女の正体をそれを取り出して言う。

「貴女はエフェクト・ヴェーラー……、そうだよね？」

「はい、その通りです」

彼女、エフェクト・ヴェーラーはにこやかに笑って答える。

「あの、本当にありがとうございます！ わざわざ助けていただきただけでなく私のカードまで拾っていただき……。本当、何と申し上げれば……」

「は、はあ……」

ここまでお辞儀もして丁寧に言われると何と言えば分からん。別に特別なことは何もしてない……はずだ。

「あの、未だによく分かんないですけど……」

真波は申し訳なさそうに手を上げてそれを伝える。そりゃ、分からないことだらけだよな。

「ええと、つまりはですね……」

＊ ＊ ＊

「……ということになります」

「要するに、デュエル・モンスターの精霊は本当にいて、貴女はその1人。普段は見えないけど、こうして一般人に見せることが出来、そして龍一は普通に精霊が見える、と」

「そういうことです」

エフェクト・ヴェーラーが説明し、真波が要約し理解する。まあ、理解しづらいが現実なんだし信じるだろう、こいつも。

「あの、もしよろしければ貴方の傍にいてもいいですか？」

エフェクト・ヴェーラーがこっちに近づいて俺に言う。顔が目の前に迫ってきて少々吃驚したが特に問題はない。

「いいよ」

「本当ですか!？」

「別に断る理由無いし」

さて、カレーでも作るか。

「ちょっと待って龍一！ お母さんにはどう説明するの!？」

部屋を出ようとした俺を引き止めて訪ねる。というか、そんな心配

してたのかよ。

「大丈夫だよ。真実を言えばちゃんと信用する、て」

そう言って部屋を出る。

途中、真波がそういうもんなのかなあ、と呟いていたが、そういうもんなんだよ、うちの母さんは。

……………過保護だけど。

＊ ＊ ＊

夕飯を作っている最中に母さんも帰ってきて4人でカレーを食べた後、風呂を済ませて俺は自室にいた。今はデッキを考えている最中だった。

エフェクト・ヴェーラーも俺の自室にいる。理由は彼女が俺と一緒にいたいと懇願し、母さんと真波が大丈夫という信用のもとでこうなった。というか、どんな信用だよ。俺も男なんだから少しは警戒してもらいたいもんだ。幼女の趣味は俺にはないが面白いのは可愛いんだから下手をすると、ということもあり得る。ま、ないだろうけど…………。

「マスター…………」

「ん、どうした、ヴェール？」

ヴェールというのはこのエフェクト・ヴェーラーの名前だ。俺が長いからという理由で短くしたらどうやら気に入ったようだ。そして

彼女は俺のことをマスターと言う。こっちは特に気にすることはないからいいが。

にしてもどうしたんだ？ 急に真剣な表情で……。

「訊かないんですか？ 私があそこで倒れていた理由を……」

ああ、そういうことか。

「別に言いたきゃ言えればいい。そうじゃないなら言わなくてもいい」

確かに大切なことだが無理に訊くこともない。

「じゃあ、言いません」

「そうか」

彼女はそう言って彼女用に用意したベッドに潜り込む。あの様子じゃあ辛いこと何だろうな。

「お休みなさい、マスター」

「ん、お休み」

そうして暫くして寝息が聞こえてきた。よっぽど疲れてたみたいだな。

次の日から彼女もスターダスト同様に俺について来て学校に来る。勿論、精霊体になって。学校の授業が何言っているか分からない、と言っていたがそれが普通だと思う。

TURN 7 〈エフェクト・ヴェーラー〉（後書き）

エフェクト・ヴェーラーは男性なのか女性なのか分かりづらい。取り敢えずこの話では女性として進めようと思っています。

次回からデュエルが出来るといいかな、と思っています。

では、感想やアドバイスをお願いします。

後、登場人物の詳細とか書いたほうがいいですか？ よろしければそちらのほうのアドバイスもお願いします。

TURN 8 炎の進化する道（前書き）

久々のデュエルです。では、どうぞ！

TURN 8 炎の進化する道

「わりい、待ったか？」

「ううん、まだ大丈夫だよ」

「にしてもお前は相変わらずおせえなあ！」

数日経過し、休日となった俺達は町内のカードショップに来ている。理由は簡単でここで開かれる大会に出るためだ。大会と言っても小さなやつで、これに優勝したから賞金が出たり、プロデュエリストのスカウトが来るとかそういったことはない。確かに優勝すればカードが数枚貰えるが、それくらいだ。

で、その大会に出た俺達6人グループを含めた16人のデュエリスト。一回戦が始まり、俺以外の5人は二回戦に駒を進めた。俺はこれから最終戦をやるうとしていた。

「頑張れよ、龍一！」

「頑張れよう！」

「負けないでね！」

「ま、あんたなら心配ないでしょうけど」

「少しは応援しないの!？」

後ろから声援が聞こえる。そして奈々、葵はいつものことだから大丈夫だ。

ARヴィジョンのリンクも完了し、対戦相手も構えている。さて、やるか。

「デュエル！」

男	LP	4000
龍一	LP	4000

「俺のターン！」

相手から始まる。さて、どんなデッキだ？

「俺は異次元の生還者を召喚！ 次元の裂け目を発動しカード2枚伏せてターンエンドだ」

異次元の生還者	ATK	1800
---------	-----	------

そうして相手はターンを終わらせた。次元デッキとはまた厄介なもの。然し、これには関係ないけどな。

「俺のターン！」

手札と引いたカードを確認した。まあよしと言うべきか。

「サイクロンを発動、その右の伏せカードを選択する」

「なら魔宮の賄賂を発動！ 無効にする！」

あら、無効化された。重要なカードということか？ 俺は新しく引いたカードを確認する。やることは変わらなそうだ。

「エヴォルド・カシネリアを召喚！」

エヴォルド・カシネリア ATK 1600

俺のフィールドに赤い尻尾に緑の螺旋が入った爬虫類が出てきた。俺は動物に詳しくないから説明しづらい。

「バトル。カシネリアで生還者を攻撃！」

周りが驚いた声をあげる。普通はそうだろうけど……。

「ダメージステップ、収縮を発動！ 生還者の攻撃力を半分に」

「何っ！？ ぐう……」

異次元の生還者 ATK 900

生還者は小さくなりカシネリアに噛まれ破壊される。

男 LP 3300

「バトルフェイズ終了時、カシネリアの効果発動！ リリースしデ
ツキからエヴォルダ・ケラト2体を特殊召喚！」

カシネリアが2体の恐竜に姿を変える。

「そしてこの2体でオーバーレイ！ エクシーズ召喚！ 吠え盛れ！ エヴォルカイザー・ラギア！」

エヴォルカイザー・ラギア ATK 2400

ケラト2体がそれぞれ赤の光の球となり、一つとなる。そしてエメラルドグリーンの龍が現れ、その周りに2つの赤い球体が漂っている。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「そのときに生還者は俺の戻ってくる！」

異次元の生還者 ATK 1800

相手のフィールドに生還者が戻ってくるがどうでもいいか。

さて、こいつ相手にどうくる？

TURN 8 炎の進化する道（後書き）

少し表現を変えてみました。そんなに重要なことではないので気にすることはありませんが。

では、感想をお待ちしております。

TURN 9 〈吠え盛れ！ エヴォルカイザー・ラギア！〉 **（前書き）**

さて、前回の続きです。では、どうぞ！

TURN 9 〈吠え盛れ！ エヴォルカイザー・ラギア！〉

男 LP 3300
龍一 LP 4000

「俺のターン！ ドロー！」

さて、どう来るんだろうか？ 相手の様子を見ると思わしくない。
いいカードじゃないのか？

「モンスターをセット、生還者を守備表示にしてターンエンドだ」

異次元の生還者 DEF 200

「俺のターン」

何もしてこなかったか。引いたカードはウエストロか。

「このままバトル！ ラギアでセットモンスターを攻撃！ エヴォ
リューション・フレア！」

ラギアの放った炎がセットモンスターを包む。それが表側になると
モンスターが現れ破壊される。名前は分かるが説明しづらい。

閃光の追放者 DEF 0

「モンスターをセットしてターンエンド」

さて、どうしたものか。

「俺のターンだ！ ドロー！」

引いたカードを見てにやけるのが見える。動きそうだな。

「ガーディアン・エアトスを特殊召喚！」

ガーディアン・エアトス ATK 2500

フィールド上に翼とどこかの民族衣装のようなものをつけた女性が現れる。確かにいい、だが……。

「^{トラップ}罠発動！ 奈落の落とし穴！」

彼女の下に落とし穴が現れそこに引き寄せられるように落ちていく女性。あの飾りなのか！？ 飛べないのか！？ どうゆう仕組みなの、あれ！？

「くそっ！ 永続罠、マクロコスモス！ そして魂の解放を発動！
俺の墓地の魔宮の賄賂を除外！」

墓地のカードを除外して空にして何する気だ？

「俺の墓地にカードが無く4枚以上カードが除外されているからカ
オス・グリードを発動！」

成程、そういうことか。ならば！

「それは止めさせてもらう！ ラギアの効果発動！ このカードの

エクシーズ素材2つ使い、魔法・罠の発動及びモンスターの召喚・特殊召喚を無効にし破壊する！」

「何っ!？」

「ソウル・クラッシュ！」

ラギアが2つの球を食い、それをエネルギーにして相手のカードを破壊する。それより、こいつを知らないのか？ 有名だと思ったんだが。……嫌な意味で。

「……ターンエンド」

「よし、俺のターン！」

これで決められるな。

「エヴォルド・ウエストロを反転召喚！ そしてリバース効果発動！ デッキからエヴォルダー・ディプロドクスをデッキから特殊召喚し効果発動！ エヴォルドによって特殊召喚されたのでマクロコスモスを破壊！」

エヴォルド・ウエストロ ATK 700

エヴォルダー・ディプロドクス ATK 1600

緑のトカゲと恐竜が出てくる。さて、ここまでやったが全然やる必要のないことがある。まあ、ディプロドクスは強制効果だから仕方ないが。

「バトル。ウエストロで生還者を攻撃！」

ウェストロが生還者に噛む。然し、小さなトカゲに人が殺されるのも珍しいが毒でもあるのか？

「ディプロドクスとラギアでダイレクトアタック！ エヴォリユーション・フレア！」

「ぐわああああ……」

男 LP 0

2体が相手を攻撃して相手のライフをゼロにする。さて、一回戦は勝利か。

「いやあ強かったぜお前！ 手も足も出なかったぜ！」

周りのARヴィジョンが消え、それと同時に対戦相手の男が近づいてくる。

「次も頑張れよ！」

「はい！ ありがとうございます！」

相手と握手してフィールドを離れる。今回は幸先いいな。二回戦は誰になるかな。

「お疲れ〜！」

「相変わらず強いな！」

「今回は新しいデッキ？」

「ま、そういうとこだ」

みんなのもとに戻り色々話す。そう、今回使ったデッキは昨日作ったものだ。最初にまわしてみただけどうまくまわってよかった。大会は1つしかデッキを使えないが、初めてにしてはよかった。

さて、次が楽しみだ。

TURN 9 〈吠え盛れ！ エヴォルカイザー・ラギア！〉（後書き）

技名に疑問しかない。うん、こういう才能も無いのでどうしようもない。

さて、愚痴はこれからもよろしくお願いします。

では、感想待ってます！

では、また次回！

TURN10 くあまりにも呆気なかった。うん、そんな気がするく**(前書き)**

デュエルの内容は余りにも酷すぎる……。いつものことか。

ソルデを並べてみたいと思ったらこんなことになりました。

TURN 10　くあまりにも呆気なかった。うん、そんな気がするく

「俺はエヴォルダー・エリ阿斯2体とエリ阿斯、エヴォルダー・テリ阿斯でオーバーレイ！　エクシーズ召喚！　燃え盛れ！　2体のエヴォルカイザー・ソルデ！」

エヴォルダー・エリ阿斯	DEF	2400
エヴォルダー・テリ阿斯	ATK	2400
エヴォルカイザー・ソルデ	ATK	2600

「これでターンエンド！」

龍一	LP	4000
翔	LP	4000

二回戦も順調に勝ち進み、俺達は今準決勝をやっている。相手はドラグニティ使いの翔だ。先行1ターン目で手札を1枚にしてしまったけど俺のフィールドには現在青い龍、ソルデが2体いる。あのデッキでは対策は難しいはずだ。で、現在俺はあいつに怒っている。理由は言わないでおくけど。

「俺のターン、ドロー！」

さあ、地獄の始まりだ！

「どんな強力なモンスターを並べてもこいつには無意味だ！　ブラック・ホールを発動！」

フィールド上に黒い巨大な渦が巻き起こる。ソルデは周りに漂っている球体にバリアを張らせて嵐が止むまでその身を守っていた。

「何故破壊されない!？」

「フツ、ソルデはエクシース素材がこのカードにある限りカードでは破壊されない」

「なん……だと……?」

おお、驚いてる驚いてる。だが、恐怖はまだこれからだぜ!

「なら戦闘で破壊するまでだ! 龍の渓谷を発動!」

風景が夕暮れ時の谷間に変わっていき、龍やら鳥やらが飛んでいるのが見える。あいつのホームグラウンドになったか。

「そして効果を発動し、手札からドラグニティーフランクスをコストにデッキからドラグニティードウクスを加えてそのまま召喚! 効果発動して墓地からフランクスを装備! そして装備カードとなったファランクスを自身の効果で特殊召喚!」

ドラグニティードウクス ATK 1500↓1700

ドラグニティーフランクス ATK 500

翔のフィールドには現在白い鳥人が小さな龍に乗ってくるが、来た途端にドウクスが降り立ちフランクスが並ぶ。

「そしてレベル4のドウクスにレベル2のフランクスをチューニング! シンクロ召喚! 飛躍せよ! ドラグニティナイトーヴァ

ジュランダ！」

ドラグニティナイトーヴァジュランダ ATK 1900

そして何も知らずにその2体の一つにさせ赤い龍を出してきた。うん、もういいや。

「ヴァジュランダの効果発動！墓地の……」

「はいはい、ソルデの効果発動。エクシーズ素材1つ使い特殊召喚されたモンスターを破壊する。ビッグバン・インパクト！」

赤い龍は出てきたとき何かを呼び出そうとしていたが、ソルデが炎で攻撃して破壊した。翔は驚いているが、確認しなかったあんたが悪いと思う。

「……ターンエンド」

「じゃあ俺のターン、ドローしてこのままバトル」

翔が怖がっているけど気にしない。俺は今凄くイライラしてるんだ。

「あの……」

「ん、なあに？」

翔が何か言いたそうにしている。聞くだけは聞いてやろう。

「さっきの……聞こえてた？」

「ああ」

「やっぱり怒っていらっしやいます？」

「今頃気づいたの？」

俺はトーンを下げて言う。何が原因であんなこといったのか知らないけど、俺はそれが大嫌いだと何回も言ってるよねえ。

「誰に女装させたい、ってえ？」

「ちょ、声に出てる！」

「ワザと出してるんだよ？」

「ひいひい……」

周りが怯えているけど気にしない。確かに俺は女顔だし黒い髪はさらさらで少し長いし声も高いことは自覚あるよ？ でもね、でもね……。

「いくら冗談でも言っていないことと悪いことがあるよねええ？」

「どうもすいませんでしたー！」

翔が土下座してるけど許す気はないよ？ 何回も言ってることだし。

「……チョット……頭冷やソウカ？」

「エ……」

「ソルデ2体でダイレクトアタック！ エヴォリユーション・ストリーム！」

「許す気無しかよ！？ って、うわああああ……」

ソルデ2体が翔に炎を放って攻撃する。そして彼のライフをゼロにした。

翔 LP 0

そして、デュエルが終了しヴィジョンが消えていった。

「くそっ、次元幽閉伏せるの忘れてた！」

……………。

「反省してないようだね、翔？」

「え……」

「後でオハナシしようか」

「い、いえ……。慎んで……」

「確定事項、だよ？」

「……はい」

うん、漸く黙ってくれた。

さて、次はいよいよ決勝。相手は葵。代行天使に勝てるかな？ ま、
全力でいだけだな！ 楽しみだ！

TURN10 　くあまりにも呆気なかった。うん、そんな気がするく（後書き）

さて、漸く主人公の容姿を書けました。そして無理矢理感MAXだけれど、気にしません。

龍一を女顔にしようか迷いましたが、結局そうすることに……。そして龍一を暴走させました。

さて、それではまた次回！

TURN 11 〈駆け引きは上手に!〉 〈前書き〉

このデュエルもかなり一方的な気がしてきた……。では、小さなデュエル大会の決勝戦、どうぞ。

TURN 11 〈駆け引きは上手に!〉

「俺はエヴォルカイザー・ラギアをエクシーズ召喚。カードを2枚伏せてターンエンド」

「私は神秘の代行者 アースを召喚。効果発動してデッキから創造の代行者 ヴィーナスを手札に加えてカードを1枚伏せてターンエンド」

エヴォルカイザー・ラギア ATK 2400

神秘の代行者 アース ATK 1000

龍一 LP 4000

葵 LP 4000

現在、決勝戦を行っている。相手は代行天使を扱う葵。俺のフィールドはラギア1体と伏せカードが2枚、葵にはアースが1体と伏せカードが1枚、手札は5枚。

「俺のターン」

さて、3ターン目に入り、手札は4枚になるわけだが対処が難しい。伏せカードはともかく手札にオネストがあると厄介だ。誘ってみるか。

「エヴォルド・カシネリアを召喚してバトル、カシネリアでアースを攻撃！」

さあ、どうくる？　アースが破壊出来れば上々、オネストが出てくれば儲け物だ。

「罨発動、攻撃の無力化！　その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる」

「……」

そうきたか。カシネリアが突進するが突如現れた渦に足止めされてしまう。スペルスピードの関係上、ラギアの効果は発動出来ない。

「ターンエンド」

「じゃあ、私のターン、ドロー！」

さてと、ここからのことは大体予想出来る。然し、それ通りに来るか……。

「創造の代行者　ヴィーナスを召喚！　そして効果発動、ライフを500払ってデッキから神聖なる球体ホーリーシャイン・ボールを特殊召喚！」

創造の代行者	ヴィーナス	ATK	1600
神聖なる球体	DEF	500	

来たか。いつも通りまわってるな。だが、そうはいかない。

「罨発動、連鎖除外！」
チェーン・ロスト

「え……？」

葵は相当驚いている。まあ、普段使うことは少ないからいきなりで吃驚したんだろうな。

「効果は分かってるよね？ 攻撃力1000以下の神聖なる球体が特殊召喚されたのでそいつを除外。更に同名カードが手札・デッキにあればそいつも除外するよ」

「……手札にはないわ。確認して」

彼女がそう言うのと5枚の手札が目の前にパネルとして表示される。クリスティアにヒュペリオン、死者蘇生に和睦の使者とジュピターか。オネストは無いし、これなら対処は簡単だ。そしてデッキから2枚の球体が除外される。そうすると目の前のパネルが消え、次の行動に移った。

「だったら、レベル3のヴィーナスにレベル2のアースをチューニング！ シンクロ召喚！ 癒やせ！ マジカル・アンドロイド！」

二人の代行者が1つになると今度は色とりどりの服を着た女性のようなものが現れた。これは……。

「ラギアの効果発動！ その特殊召喚を無効にする！ ソウル・クラッシュ！」

流石に相打ちなんて狙われたら堪ったもんじゃない。それだけは避けないと……。

「そう。でも、先程の手札を忘れた訳じゃないでしょう？ 墓地のヴィーナスを除外してマスター・ヒュペリオンを特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK 2700

葵のフィールドに今度は太陽の化身みたいな人が現れる。忘れてたわけじゃない。そうじゃなきゃさっきウギアの効果を使った意味がない！

「暴発動、奈落の落とし穴！ ヒュペリオンを除外する！」

「……！」

ヒュペリオンは穴の中に落ちていく。エアトスといい、背中についてるのは飾りなのか？ 飛んでかわせないのか？ 別の力でも働いてるのか？ そして葵は驚きを隠せてないようだ。

「……カードを1枚伏せてターンエンド」

今伏せたのはやっぱりあれか？

「俺のターン」

引いたカードを確認する。このターンには終わらないか。

「カシネリアをリリースし強制進化を発動。デッキからエヴォルダ―・テリアスを特殊召喚。この召喚はエヴォルドと名のついたモンスターによる特殊召喚になるのでテリアスは効果で攻撃力が500下がるが、それは関係ない。死者蘇生を発動し、お前の墓地のアースを特殊召喚！」

「アースを、蘇生？」

エヴォルダー・テリ阿斯 ATK 2400↓1900
神秘の代行者 アース ATK 1000

葵がアースを蘇生したことに驚いているが、必要なのはチューナーだ。このレベルの合計ならあいつが出る。

「俺はレベル6のテリ阿斯にレベル2のアースをチューニング！シンクロ召喚！」

恐竜と代行者が1つになって見慣れているあの龍の姿となる。

そう、出すのは俺の一番最初からの相棒だ！

「唸れ！ スクラップ・ドラゴン！」

不思議な光を放って俺の相棒の体は現れた。

TURN 11 〈駆け引きは上手に!〉 〈後書き〉

やっぱり一方的な気がする。なかなか上手く書けないものです。

それではまた次回もよろしくお願いします！

TURN 12 〈もう1体の精霊、唸れ！ スクラップ・ドラゴン！〉 (前書き

どうかデュエル大会完結。では、どうぞ。

TURN 12 　　くもう1体の精霊、唸れ！　スクラップ・ドラゴン！く

龍一	LP	4000
葵	LP	4000

俺のフィールドに現れたのは昔からよく使っている屑鉄の龍、スクラップ・ドラゴンだ。色んなデッキで使うから活躍の場は結構あったりする。あれ、こっち見てる？

「ほう、精霊を視認出来るようになった話は本当か」

うわ、喋っ……た？　今こいつ何て言った？　まさかこいつが……。

「スターダストの言ってたもう1体の精霊、て……」

「それは我のことだな」

成程、漸く理解した。だからこいつは俺に向かって話しかけてるのか。

「どうしたの？」

暫く動かない俺を不審に思ったのか、葵が話しかけてくる。端から見たら独り言言ってるようにしか見えないからな。

スクラップ・ドラゴン	ATK	2800
------------	-----	------

「悪い、スクラップ。つもる話は後で」

「了解した」

「バトル、スクラップでダイレクトアタック！ クラッキング・レイ！」

スクラップは口を開くとそこからエネルギー弾を打ち出して攻撃した。だが、あの伏せカードは……。

「罠発動、和睦の使者！」

やっぱりそうか。スクラップの効果を使わなくて正解だったな。さつき手札確認したからなんだけど。そしてバリアが現れ葵を球から守った。

「バトルを終了し、カード1枚伏せてターンエンド」

さて、どうくるだろうか？

「私のターン」

フィールドは空っぽだが手札がある。何が来る？

「大天使クリスティアをコストにワン・フォー・ワンを発動、デッキから勝利の導き手 フレイヤを特殊召喚、そして死者蘇生を発動して墓地から……」

「神の宣告を発動、ライフ半分払って死者蘇生を無効化する！」

「……！」

勝利の導き手 フレイヤ ATK 500

龍一 LP 2000

何っー引きだ、一瞬焦ったぞ。でも、だいぶやりやすくなった。

「なら奇跡の代行者 ジュピターを召喚！ 効果発動して墓地からアースを除外して……」

「手札からエフェクト・ヴェーラーの効果発動！ その効果は無効にする。アビリティ・バインド！」

「……」

奇跡の代行者 ジュピター ATK 2200

葵のフィールドにまた代行者が現れ、手から光を放っていたがそれをヴェールがバインドをかけて封じた。葵は何も言えないようだった。ヴェールは少し生き生きしてるが、何故？

「……ターンエンドよ」

「ん、俺のターン」

葵に手札は無し。引いたカードは化石調査か。

「カードを伏せて、スクラップ・ドラゴンの効果発動、俺の伏せカードとジュピターを破壊する、ミューチャル・ディストラクション！」

そう言うスクラップが咆哮して俺のカードとジュピターが破壊されていった。

「バトル、ラギアでフレイヤを、スクラップでダイレクトアタック！ エヴォリューション・フレア！ クラッキング・レイ！」

ラギアとスクラップがそれぞれ攻撃することで葵のライフを一気にゼロにした。

「フウ……」

デュエルが終わると同時に葵がその場に座り込む。どうしたんだ、急に？

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわよ。そのデッキとデュエルして疲れたのよ」

「……………」

何か今酷いこと言われた。一生懸命頑張って考えたデッキなのに！

まあ、否定はできないかもしれないけど……。

そして、その日のその大会は俺の優勝で幕を閉じた。勿論、優勝賞品のカードは貰ったよ？ 何故か5枚もあって吃驚したけど……。賞品をこんなに多くして大丈夫なのかなあ？ ま、俺はそこまで大会に出たいとも思わないしな。というか、こうやって出るほうが珍しい、というより今までなかった。こいつらと会ってからは……。大会は今まで見ることでだけだったからなあ。

悠奈や優がしつこすぎて今回は出ただけ。いや、いつもしつこく誘ってくるし、今回は仕方なかった。うん、それだけだ。

TURN 12 　くもう1体の精霊、唸れ！　スクラップ・ドラゴン！く（後書き

最後のほうはエヴォルが関係無くなった気がしてしょうがないです。
もしかしたらまたいずれ使うかもしれません。

では、また次回もよろしくお願いします！

TURN 13 〈大会終了後の夜〉（前書き）

今回はデュエル無し。色々おかしいところが出てくるかと思っています。
最後のほうにおまけがありますが、そこは別に読まなくてもいいです。

それでは、どうぞ！

TURN 13 〈大会終了後の夜〉

「やっぱり違うよな……」

町内のショップのデュエル大会も終了し、頃合いを見計らって俺達はそれぞれ帰路についた。そしてその夜、俺は優勝賞品のカードの5枚のうちの1枚を見ていた。

「でも気のせいかな……」

さつきからこれの繰り返しだ。そのカード、カオス・ソルジャー――開闢の使者――のことなんだがどうもおかしい。どこが変かと言われると言えないけどそれでも何かがおかしい。レア度とかイラストのことではなく、全体的な雰囲気とでもいうべきか。説明しづらい。

「……わっかんね」

俺はその開闢をとあるデッキ入ったのケースにしまうと別の4枚を取り出した。開闢に気をとられて他のカードを見てなかったがこっちも相当豪華だ。

「強欲で謙虚な壺にヴェルズ・ウロボロスにダイガスタ・エメラルにラヴァルバル・チェイン………」

……………。

おいおい、何つー豪華なカードばかりだ。洒落になってないよ。取り敢えず強謙はデッキに入れてウロボロスにエメラル、チェインは

エクシーズのカード群に入れておこう。既に1枚ずつあるけど複数枚必要になることも考えられるからな。……ないと思うけど。

「さてと」

それらのカードをしまおうと今度は精霊の宿っている3枚のカードを取り出した。そうそう、精霊の宿るカードはある程度決まっているらしく、同じ種類でも別のカードに宿ることは無いみたいだ。特別な事情があれば別みたいだが。

特にスクラップ・ドラゴンに宿っていたことは吃驚したけど、同時に嬉しくも思った。だって、親父から最初に貰った遊戯王のカードだからな。思い入れもあるし兎に角嬉しい。因みに、あれから精霊の宿るカードは毎日持ち歩くようにしている。ヴェールに至っては寂しがりやで基本的に放さないようにしている。甘えたい時期だというのもある。

これからはこの部屋も賑やかになるな。

おまけ　　く龍一とヴェールのとある会話く

※台詞だけなので台詞の前に名前が書いてあります。

龍一「そーいやヴェール、あのときすぐく生き生きしてるように見えたが何かいいことあったのか？」

ヴェール「あのときっていつですか？」

龍「葵と戦ったとき。ほら、ジュピターの効果を無効にしたときだよ」

ヴ「あああのときの！ 単に使ってもらって嬉しかっただけですよ！」

龍「……どうゆうこと？」

ヴ「ああやってちゃんとマスターに使ってもらえて私、すごく嬉しかったんです！ 保護してくれたマスターには本当に感謝しています！」

龍「お、おお……（そこまで頭を下げられると何だかこっちも少し嬉しいような……。それにすごく可愛くて和む。うん、もっといいめた……。いや、よろしくない。でもやっぱりいい……。いや、ダメだ……。でも……。）」

ヴ（黙り込んでますが、何かあったんでしょうか……。？）

おまけ 終わり

TURN 13 〈大会終了後の夜〉（後書き）

龍一はただ単にSです。しかも怖いことに普段はそんなところを表にしなく、余り気づかれない上に質の悪いほうだと思います。まあ、基本的にこんなことはないので大丈夫だと思いますが……………。

それではまた次回！ いつになるかは知りませんが……………。

TURN 14 〈精霊界へ〉（前書き）

取り敢えず更新です。今回もデュエル無しです。では、どうぞ！

TURN 14 〈精霊界へ〉

俺は今混沌空間カオス・フィールドという所にいる。え、そこはどこだ、て？ 遊戯王のフィールド魔法の一つ、そしてデュエルモンスターの精霊界でもある。何でそんなところにいるんだと聞きたいだろうな。それを教えるために少し時間遡る。

＊ ＊ ＊

大会から数日後のある平日……別にサボりじゃないからな？ 高校受験の日だから生徒は休み。今学校は受験生が筆記試験を受けている。明日はデュエル実技試験、その次の日も休み。所謂、高校受験における休みというわけだ。本来ならみんなと遊ぶ約束があったんだが、ヴェール達にあるカードを持って精霊界、混沌空間に行ってしまうと言われたので現在ここにいる。

「で、ヴェール。呼び出した理由は何だ？」

実際、何故ここに来ることになったのかは知らない。傍にはヴェールにスターダスト、スクラップがいる。

「はい、ここで暴れている人を止めてほしいのです」

「誰を？」

「それは……」

ギヤアアアアアアアアア

「「「!?!?!」」」」

何だ今のは!?!? 悲鳴のように聞こえたけど何事!?!?

「またあいつが暴れているのか!?!?」

あいつ? 誰のことだ?

「疑問はあるだろうが私の背中に乗ってくれ」

「分かった」

確かに疑問は残るが今はスターダストの言う通り俺は彼女の背中に乗る。そしてヴェールも俺に捕まってスターダストとスクラップは声が響いてきた場所に飛び立った。

「……異次元の女戦士にカオス・ソーサラー、ダーク・アームド・ドラゴン……。みんな、相当傷ついてやがる……」

かなりの距離を飛んだだろうか、それでも目的地にはまだ着かない。その間に様々な光属性や闇属性のモンスターがボロボロになってそこら中に倒れていた。

「ライトパルサー・ドラゴンにダークフレア・ドラゴンも……」

「余りにも……酷いです」

「噂以上に酷くないか?」

「見えてきたぞ、その問題の精霊が！」

目的地に近くなり傷ついた精霊もドンドン多くなってきた。そしてその中で唯一そこに仁王立ちしている蒼色が基調の金色の入った鎧、仮面、盾、そして銀が眩しい剣。そこにいたのは間違いない。ヴェール達に持ってきてほしいと言われ、先日の大会で貰ったカードを持ってきたそのイラスト通りの精霊。そして感じた違和感はいくらだったのかもしれない。

「カオス・ソルジャー——開闢の使者——……」

……そう、余りにも強大すぎる力だったのかもしれない。

「ふん、こんなものか。……つまらん」

彼はそう呟く。その周りで倒れている精霊は痛々しい傷が沢山見え、呻き声が聞こえる。

「この程度では駄目だ！ 私……もっと、もっと力が欲しい！！」

今のははっきり聞こえた。力を求めているのか、こいつは？

「カオス・ソルジャー！ 何故このようなことを！」

ヴェールは威勢よく飛び出して彼の前に飛び出して怒る。然し、開闢はそれを気にせず彼女を睨む。

「何だ貴様は……？」

「ひ……！？」

逆に追い返される始末だ。彼女は恐怖で俺の後ろに逃げ隠れてしまった。

「ほう……。貴様、人間か？」

俺を睨みながら威圧感をかけてそう言ってくる開闢。こいつ、何があつたんだ？

「しかも私のカードを持っているのか」

どうやらそのことにも気づいたようだ。俺も薄々気づいていた。スターダストやスクラップも同じようだ。

「そうだけど、何故このようなことを？」

「私には力が欲しい！ 何にも負けぬ強大な力が！！」

さっきから呟いているのが聞こえていたからもしかしたら、と思っただが、その通りらしいな。

「じゃあ、デュエルしようよ」

「何？」

「ここにもあるんだろ？ デュエルは。だったら俺を倒してみろよ！ そうすればその力とやらも見つかるかもしれないぜ？」

仮にもデュエルモンスターズの精霊界だ。それぐらいはあるはずだ。余りやりたくない方法だが仕方ない。それに、困っている奴等が沢

山いるんだ。見逃せない。

「いいだろう。私も人間に興味があったところだ。面白い！」

どうやらのってくれたか。よかった。俺はスターダストから降りてデュエルディスクをセットし、Dゲイザーを装着する。

「大丈夫か？ 龍一」

「ん、何が？」

後ろから心配する声が聞こえてくる。どうしたんだろうか？

「何が、じゃない！ あんな根拠の無いことを言って……！」

「ああ……。大丈夫、勝つよ！」

俺をそう言って前を向き、構えた。

「「デュエル！！」」

龍一	LP	4000
開闢	LP	4000

TURN 14 〈精霊界へ〉（後書き）

次回はデュエルです。前回のエヴォル（？）デッキでは無いことだけは言っておきます。うん、ぶっ飛んだような気がしてならない。

では、次回もお楽しみに！ 感想等もお願いします！

TURN 15 〈VSカオス・ソルジャー（前編）！ ー求める力の為にー〉

今回はデュエルです。言うこともなくなってきたような気がします。
では、どうぞ！

TURN 15 〈VSカオス・ソルジャー（前編）〉！ 一求める力の為に一

「俺のターン！ モンスターをセット、カードを5枚セットしてターンエンド！」

さて、開闢とのデュエルが始まったんだが、いきなり手札をゼロにしてしまった。何とかなるけどどうなるかはまだ分からない。

「守りを固めたつもりか？ 私のターン！」

うん、そう思うよね。いきなり手札全てを伏せられたらそう思うよね。

「そんなもの、私には通用しない！ 私はライトロード・マジシャン ライラを召喚！」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 1700

彼のフィールドに白い服を着た女性が現れる。やはりそのカードを使うか。

「バトル！ 行け、ライラ！ そのセットモンスターを攻撃せよ！」

ライラが杖を振りかざしてセットモンスターを攻撃する。その判断ははつきり言って嬉しい。そしてカードが表側になると一つ目の壺のようなモンスターが現れた。

「セットモンスターはメタモルポット。お互いに手札を全て捨て、デッキからカードを5枚ドローする」

「何!？」

メタモルポット DEF 600

俺の捨てる手札は無い。よって、カードを5枚ドロするだけだ。向こうはかなり悔しそうな顔をしている。ま、ゴーズやオネストが捨てられたらねえ。だけど、引いたカードを見て少し笑った。

「お前のおかげで来たぜ! 大嵐を発動!」

成程、確かにいいカードだ。だが、このタイミングを寧ろ待っていた!

「罠発動! ゴブリンのやりくり上手!」

「何だと!？」

「驚くのはまだ早い! 残りの2枚のやりくり上手、そして強欲な瓶にこれらのカードを墓地に送って速攻魔法、非常食を発動!」

「ば、馬鹿な!？」

「うわぁ、凄い……」

「よくやるもんだ」

「よくこんなことが起きたな」

この状況を見て各々の感想が聞こえる。開闢は非常に驚いている。

ヴェール達も少し驚いてる。俺もこれにはホント驚いた。

「いくよ。まず非常食でライフを4000回復、瓶の効果で1枚ドロー、やりくり上手で4枚ドローし手札1枚をデッキの一番下に戻し、4枚ドローし1枚戻し、また4枚ドローし1枚戻す」

龍一 LP 8000

うん、合計10枚ドローしたことになった。

「くそっ！ カード1枚伏せ、エンドフェイズにデッキの上3枚を墓地に送ってターンエンド！」

開闢が非常にイライラしているように見える。それはうまくいかなかったからか？それとも別の理由が？

「……まあいいか。俺のターン！」

さて、合計16枚の手札をどう消費しようか。

「墮天使ゼラートを捨ててダーク・グレファアを特殊召喚！」

ダーク・グレファア ATK 1700

俺のフィールドに闇に染まった戦士が現れる。笑いが不気味だ。

「そして効果発動、墮天使スペルビアをコストにデッキからゾンビキヤリアを墓地に送る。そして闇属性モンスターが墓地に3体いるのでダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚！」

ダーク・アームド・ドラゴン ATK 2800

そして今度は鎧を装着した漆黒の龍が現れる。効果が強いから多用するんだよな、こいつは。

「そして手札断殺を発動。お互いに手札2枚捨て新たに2枚ドロースする」

はつきり言って余り使いたくないカードだけどここの際仕方ない。ネクガとダクリ捨てて新しくドロースする。

「更に、ダーク・グレファアをリリースし堕天使ゼラートをアドバンス召喚！ このカードは墓地に闇属性モンスターが4種類以上存在する場合、闇属性モンスター1体をリリースしてアドバンス召喚できる。そして効果発動。堕天使アスモディウスをコストにお前のモンスターを破壊する！」

「くっ……」

堕天使ゼラート ATK 2800

闇の戦士が消えると今度は闇に染まった天使が現れる。そして闇を纏った剣を振りかざしてライラを破壊した。

「バトル、ゼラートでダイレクトアタック！ 悪魔の波動！」

そしてゼラートは体中から波動を出してそれが開闢を襲った……と思ったら、鐘の音が響き攻撃が防がれた。

「手札からバトル・ウェーダーの効果発動！ ダイレクトアタック

を無効にしバトルフェイズを終了する！」

バトル・ウェーダー DEF 0

やっかいなカードが現れたな。ここで終わらなかったか。

「なら、ゼラートの効果をもう一度発動し、キラートマトをコストに破壊！　そして月の書を発動しゼラートを裏側守備に変更してカードを3枚伏せてターンエンド」

再びゼラートが剣を振りかざすとバトル・ウェーダーを破壊して本に挟まれて姿が見えなくなった。このターンは終わったけど何か、嫌な予感がする……。

TURN 15 〈VSカオス・ソルジャー（前編）〉 ー求める力の為にー

今回のデッキは闇属性モンスターデッキです。モンスターは基本、闇属性ばかりを集めています。次回はこの続きになります。

では、次回もまたよろしくお願いします！

TURN 15 〈VSカオス・ソルジャー〉**（後編）**！一力の先にあるものは――

決着編です。では、どうぞ。

TURN 15 〈VSカオス・ソルジャー（後編）〉！一力の先にあるものとは

「ならばそのときに使わせてもらう。罨発動、針虫の巣窟！」

伏せていたのはそのカードか。厄介だな。ダーク・アームドの効果を使わなくてよかったけど、デッキトップが5枚も墓地に送られた。しかも全部モンスターカードかよ。困ったな……。

龍一	LP	8000
開闢	LP	4000

「そして私のターン！ 貪欲な壺を発動！ 墓地からオネスト、冥府の使者ゴーズ、ライラ、ライトパルサー・ドラゴン、ダークフレア・ドラゴンをデッキに戻して2枚ドロー！」

この状況でドローカードか！ こういうときって大抵嫌な予感しかないんだよね……。

「手札抹殺を発動！ お互いの手札を全て捨てその枚数分新たにドローする！」

「!？」

そのカードもくるか。死者蘇生やゴーズが消えてしまった。しかも引いたカードはそこまでよくない……。

「そしてブラック・ホールを発動！ お前のモンスターを全て破壊する！」

「何だと!?!」

今度はフィールドに巨大な黒い渦が現れてダーク・アームドとゼラートを飲み込んで消えていった。どうしよう……。――

「お膳立ては整った! 私らは墓地のジェインとトラゴエディアを除外し私自身、カオス・ソルジャー――開闢の使者――を特殊召喚!」

そう言って彼のフィールドに彼自身が現れる。これ以上は流石にマズい!

「罨発動! 神の警告! ライフ2000払ってその召喚を無効にし破壊する!」

龍一 LP 6000

そしてすぐに開闢に雷が落ちる。この宣告や警告を下す神様って雷を落とすのかな? でも、これで……。

「言っただろう? お膳立ては済んだと! 戦士の生還を発動! 私を手札に戻して墓地のライコウと終末の騎士を除外してもう一度特殊召喚!」

終わると思ってませんでしたさ、こんちくしょう! また出てくるなんてどういふことだよ!!

カオス・ソルジャー――開闢の使者―― ATK 3000

「バトル! 私自身でお前にダイレクトアタック! 開闢双破斬!」

開闢は剣を俺に振りかざしてくる。やはり向かってきたか！

「墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！ 除外してその攻撃を無効にする！」

俺の目の前にネクロ・ガードナーの幻影が現れると攻撃を防いだ。助かった……。

「無駄なことを……。まあいい、ターンエンドだ」

そうして彼はターンを終了する。でもどうする？ 手札には聖槍に聖杯、ユベル最終形態にサイクロン、終末の騎士、混沌空間だけだ。次のドロローに全てがかかっている！

「俺の、ターン！」

そうしてドロローカードを確認する。かけてみるか。

「闇の誘惑を発動！ カードを2枚ドロロー！」

ドロローカードは……いける！

「終末の騎士を除外。そして墓地から堕天使ゼラート、アスモデウス、キラー・トマト、ダーク・クリエーター、ダーク・アームド・ドラゴン、ダーク・グレファアー、終末の騎士を除外し手札から究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴンを特殊召喚！」

究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴン ATK 4000

俺のフィールドに闇に染まった長く大きい龍が姿を現す。これでオネストも怖くない！

「そしてダブルアタックを発動して手札からユベルーDas Extremor Tracing Drachenを捨ててレインボー・ダークを2回攻撃を可能にする！」

ユベルから力を受け取った龍は赤く光り、一つ咆哮した。

「すごいです！」

「ああ。だが……」

「あの手札はもしかしたら……」

後ろでヴェール達が何か言っているけど、多分大丈夫だろう。

「バトル！ レインボー・ダークで開闢を攻撃！ レインボー・リフレクション！」

レインボー・ドラゴンは口から虹色の光線を開闢に向けて発射した。然し、彼の体は突如光りだした。

「フツ、ダメージステップ、手札からオネストの効果発動！ その攻撃力を貰って返り討ちだ！」

やっぱりそうきたか。でもね、それは既に予想済みでオネストは怖くないとさっき言った！

「罨発動、透破抜き！ 手札、墓地から発動したモンスター効果を

無効にしゲームから除外する！」

「何!？」

さっき貪欲で回収してたからそんな感じはしたよ。これで勝ちだ!

「ぐう……」

開闢 LP 3000

「これで終わりだ! レインボー・ダークでダイレクトアタック!
レインボー・リフレクション!」

再び発射された虹色の光線が今度はプレイヤーに向かった。

「ぐわああああ……」

開闢 LP 0

勝つことはできた。周りのソリット・ヴィジョンもデュエルが終わって消えていった。

TURN 15 **VS**カオス・ソルジャー**（後編）**！一力の先にあるものとは

一応決着はつきました。だけど、まだ終わりませんよ？ 次は会話が中心になります。

では、次回もよろしくお願いします！

TURN17 〈カードの意味〉（前書き）

開闢編終了です。相変わらず短いですが……。

では、本編をどうぞ！

TURN 17 〈カードの意味〉

「負けた……だと？ この私が……？」

デュエルに敗れ啞然としていた開闢が最初に発した言葉はそれだった。自分が負けたことが未だに信じられないのだろうか？

「一つ聞きたい。何故力を求める？」

俺は彼に近づいてそう訊く。理由の分からないことが多すぎるのだ。そのままではこいつの何が悪いのかが分からない。

「私は最近になって再びデュエルフィールドに立つ事が許された」

そういやそうだな。暫くの間は禁止カードとしてデュエルに使われることはなかった。彼等が再び活躍しだしたのはつい最近のことだ。

「そうやって活躍出来るようになったのは嬉しい。だが、それでも以前とは違って簡単にやられることが多くなったのだ」

確かにそうだな。いくらステータスが高く出しやすい、更に効果も相当優秀とくれば活躍もする。昔なんか混沌帝龍もいたから余計に酷かった。

その反面、魔法・罫は通用するしモンスター効果も受ける。耐久面は至って普通だ。勿論、攻撃力も簡単に超えてしまうやつだっている。俺のあのデッキの切り札だってそうだ。

「だから私は何にも負けない力が欲しい！」

まあ、普通はそうかもな。でも。

「馬鹿なんじゃねえの？」

「!？」

彼の愚痴が終わると開口一番そう言った。当然、開闢はこっちを見て驚いている。

「確かにお前は単体でも優秀すぎるカードだ。その分対策だったてられるし、狙われやすい。でもね、お前一つだけで勝とう何て誰も考えちゃいねえよ！」

カオス・ソルジャーは最初は儀式モンスターとして出てきた。そしてリメイクとして更に能力を付加して現れたのがこの開闢の使者だ。こいつもこの力を手に入れるのには相当苦労したんだと思う。

「デッキというのは確かにデュエリストの魂だが、一つ一つのカードで協力プレイを行うためのものでもある。カードは一つじゃ何の力も発揮できない。それくらい分かるはずだ」

それはどのカードにだって言える。制限カードで強力なダーク・アームド・ドラゴンだって一つだけだと何の力も使えない。

「力を求めることは結構。だけど、こうやって他の精霊に迷惑をかけるのは止めてくれ」

「……」

開闢はすっかり黙り込んでいる。多分分かってくれただろう。そうして俺はスターダスト達のところに戻った。

「すまない、待たせた」

「いえ、そんなことより……」

「ああ、あっさりと解決したな」

「意外な方法だったけどな」

彼等はそれぞれ感想を言っていく。ていうか、そんなに意外だったのか？

兎に角俺はスターダストの背中に乗ってもこの世界に戻ろうとした。

「待て、人間」

不意に呼び止められる。何だと思って振り返ると開闢が近づいてきた。

「名前は何と言う？」

「俺か？ 北条龍一だ」

俺は素直に答える。それを聞くと彼はフツと笑った。

「龍一か……、いい名だ。たまにはそちらに行ってもいいか？ お前の持っているカードに私の宿っていたものがある」

え、マジで？ まさかこいつらが俺にあのカードを持ってこさせた理由って……。ま、いいか。

「いいよ。別に構わない」

「それは助かる」

「但し！ 迷惑をかけてきた人達にちゃんと謝罪をいれて、今回の件で傷ついた人達の治癒をすること」

「それぐらいは承知している」

ならよかった。心配することは無さそうだね。

「じゃあ、またな！」

「ああ！」

別れの挨拶を済ませ俺達はその場から飛び立った。

「これで一件落着だな」

「全く、何でこんなことを俺がしなきゃいけなかったんだよ！」

「済まないな。手がつけられない状態だったんだ」

「どういうことだよ……」

「でも本当によかったです。これで一安心ですね！」

全く……でもいいか。

「そう言えばマスターは訊かないんですか？」

「何を？」

「先日の大会で貰われたカオス・ソルジャー―開闢の使者―を持ってきてほしいとお願いした理由を……」

「何だ、そんなことか……」

みんなが不思議に思っただけの顔を見る。ま、それもそうだろうな。俺はそれにこう答えた。

「今更訊く意味、あるの？」

TURN17 〈カードの意味〉（後書き）

何だかグダグダになったような気がします。取り敢えずうまく伝わってれば幸いです。

次回からは数話事に龍一の友人のグループの話を一人一人書いていこうと思います。いい加減他の人の話しを書きたい、というだけなんですけど……。

では、次回もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7862z/>

遊戯王 ～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

2012年1月14日15時47分発行